

「馬ではなくロバに乗って」

強く、他を圧倒し、誰よりも裕福なことを尊いものとして受け止める世界観があります。その世界観では、何故かしら、きつい言葉、傷付ける言葉が力を持ち、優しさや柔和さは「弱み」として退けられてしまいます。本当は、誰しも穏やかに暮らしたいと願っているのですが、その願いが交わるころは、不思議と衝突や軋轢が絶えない。

もちろん、戦争には戦争の、非常事態には非常事態の理屈があり、それに適った力強い正論があって、優しさや柔和さという異論が、大切なものを損なわせる原因となり得ることもあります。多分、今の世界は、すでに優しさや柔和さを異論と捉えてしまうような非常事態なのかも知れません。備えなければ、戦わなければ、舐められないように強くあらねば。国際情勢を見ても、あるいは、一人の生き方を見ても、まるでどこも、かしこも、弱肉強食の野生動物の世界のような「しんどさ」が感じられます。私たちは、神様の似姿として創造されたはずなのに、自ら動物の生き方に近づいているように思えてしまいます。「所詮、人も動物に過ぎない」と言ったコヘレトの言葉に倣っているのでしょうか。

なんて言う感傷的なことを言うてしまうのは、私も、現状の荒々しさに当てられているのかも知れません。変に想像力を発揮して、遠くの場所の苦しみや、変えられもしない不条理に関心など持つ前に、目の前の出来事に集中して余計なことは考えない生活が、この複雑な世界を生きる上では最適な選択なのでしょう。そうやって世界や、平和や、神様なんていう大きなことを思わない生き方が、一番、気が楽なのかも知れません。

しかし、こんな言葉もありまして。「哲学などする者は、緑の野にあって枯草を食う動物の如しと

悪魔メフィストに擲揶われるかも知れないけれど、私は哲学するように強いられているといった学者もあったように、一たび思考すべきとの禁断の果実を食べた人間には、そういう苦悩があるのも已むを得ぬことであろう」。これは、京都大学で哲学を教えていた西田幾多郎の言葉ですが、要するに、世界とか、平和とか、神様とかいう哲学的なことを考える人間というのは、こんなにも娯楽に溢れ、気を紛らわせる手段に事欠かない世界にあって、あえて枯草のような不味いものを食べる愚か者であると。けれど、そういうことを考えてしまう人間は、そういうことを考えるように神様に造られたのだから、もう、そこに生じる苦悩を味わうのは仕方のないことである、と。

哲学なんて知らなければ、素直に目の前の出来事に集中できるのに。神様なんて知らなければ、自分の手の届かぬ平和を求めることなんてなかつただろうに。でも、それは今更言っても仕方のないことで、私は、平和を求めるように、優しさを考えるように、神様を知るように導かれているのだから、こういう小難しいことに思い巡らせるのも、已むを得ぬことである、と思うようにしています。

だから、今回の聖書箇所を読んでも、やっぱり深く考えてしまいます。「ロバに乗ってくる王様って何？」と。そういう文学的な表現もあるよね、とか、まあ、聖書にはそういう書き方があっても不思議じゃないよね、とか軽く受け流そうと思えば、多分できてしまう。本当に、そんな王様は存在するのか、とか。そんな王様が存在したとして価値はあるのか、とか。そこまで考え深めることに、どんな意味があるのか問われると、もうそれは信仰のお話ですよ、と答えるのが関の山でしょうか。実利的な意味はありそうもない。

でも、何度も言うように、私はそういうことを考えるようにと、神様に造られたと思っているので、まあ、息をするように「ロバに乗ってくる王様」について考えてしまうわけです。格好いい馬じゃなく、小さくて弱そうなロバに乗ってくる王様って、どんな方なのでしょう。現代風に言え

ば、高級車ではなく、軽トラに乗ってやってくるような王様を、私たちはどうお迎えしたら良いのでしょうか。

もしも、私たちの考える立派な王様が、強そうな軍馬にまたがり、いかつい武器を持ち、素早く颯爽と現れるなら、それは、聖書の伝えたい相応しい王様とは違うのでしょうか。このゼカリヤ書の背景にあるのは、帝国による無慈悲な武力行使に対する強烈な批判精神です。強いこと、圧倒すること、押さえ込むことを至上命題とする主義主張に対して明確に「No!」と言っている。それは、10節にある、「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれる」という御言葉からも明らかです。エフライムも、エルサレムも自分の国のことですね。自国の戦力さえ無価値とする御心がここには表明されています。しかも、その「No!」の言葉、「戦力は要らない」という言葉は、理想論でも空想論でもなく、ある種の「疲れ」が根底にあるのだと思います。

「ロバに乗った王様」を喜んで迎えようとしている人々は、きっと、もう疲れていたのです。強さを求める国や、そのために手段を選ばない施政者に対して、もう疲れていた。辟易していた。何故なら、その霸道主義、つまり力よる支配統治によっては、その国民も周辺諸国も全然、安らかにはならなかったからです。一時は、無難に過ごしても、霸道は、霸道を生み、その繰り返しとなってしまう。もしも、霸道主義が正しい道であれば、歴史がそれを証明し、私たちの倫理道徳もそれに倣っていたでしょう。でも、そうならないってことは、やっぱり、無理筋なのだと思います。力を誇示し、強さを知らしめ、強大な武力によって世界を導くなんてことは、多分、不可能なのです。だって、時に人には、弱くても守りたいものがありますからね。

ロバに乗ってやって来る王様について、興味深い説明が付されています。「彼は神に従い、勝利を与えられた者」であると。これは、王様自身の力で勝利を得るのではなく、神様に従うことで勝利を与えられる、勝利を与えられた、ということです。権謀術数を尽くして、成り上がる、勝ち上が

ることを求めるのではないというあたりが、実に聖書らしい。でも、それがこの世の真理であると私は信じたいです。神様に従い、高ぶらず隣人に尽くすこと。キリスト教が古来大切に続けてきた、その信仰理解。確かに、キリスト教自身がそれを忘れて、成り上がり、勝ち上がることを求めた時代もありはしましたが、そういうことへの反省も踏まえて、改めて基本的なところを思い出してみたいと思います。

じっくり振り返ってみれば、私たちの感覚も、帝国主義や霸道主義によって歪められている部分があると思います。ロバに乗ってやってくるイエス様を見て、正直、どう感じるか、ということを考えてみると、素直に賛美できるでしょうか。軽トラに乗っているイエス様を歓迎できるでしょうか。問われているのは、私たち自身が持つ、王様に対する期待感、イエス様に対する信仰理解です。

イエス様は、聖なる都エルサレムに入る際に、ロバに乗って来た、と言います。それは、今日のこのゼカリヤ書の預言が成就したことの証です。イエス様は、その御姿からして、力や権威というものを手放されました。そして、その謙った御姿のまま、誰よりも弱く、力ない形で、十字架の道を歩まれたのです。その御姿は、高ぶる王、自分は偉いと錯覚している権力者に対する強烈な否定を伴っていましたが、当時の信仰者たちは、その真意を受け取ることはできませんでした。故に、イエス様は、罵られながら、馬鹿にされながら、ゴルゴタの丘を登っていくことになりました。

私たちが、この主の十字架の出来事に触れる時、どの立場でイエス様のことを見ているのか、考えてみたいと思います。罵る群衆の中にいるのか。罵る群衆の後ろにいて群衆のことを批判しているのか。あるいは、その場にはいない無関係な立場だったのか。あの十字架の現場では、どこにいても、どの立場にあっても、私たちは心安らかではられないでしょう。

しかし、むしろ安らかでない方が正しいのかも知れません。主の十字架に触れて、自分の無力さや、狡さや、疑う気持ちに気付いて、心揺さぶられて、バツの悪い感情を味わうことも大切です。

ロバや軽トラに乗ってやって来るイエス様を想像して「なんか違う」と思わされ、でも、それを受け入れろと言われて、葛藤を覚えることも。自分の思う立派な王様の姿とイエス様の御姿の違いを目の当たりにし、戸惑いを感じることも。この緊迫感が増し加わる現実世界にあって、なお優しさや柔和さを信じようとして、迷いを抱くことも。これら一見して別々な感情は、でも、一つに繋がっていると思います。ようするに、私たちは信仰と現実の間において、信じたいけど信じきれない、申し分ない信仰者になろうとして成りきれない。そんな自分と向き合うことを余儀なくされているということです。

ロバに乗った王様も。見るに冴えないイエス様も。弱さを誇る信仰も。どれもこれも理解するのは難しい。でも、その難しさの中に神様の御心はあるのだと信じて、明日から始まる受難週を過ごして参りたいと思います。主の十字架を前にした自分自身について。「馬ではなくロバに乗って」やって来るイエス様に出会った自分自身について。面倒臭がらず考え巡らせてみましょう。そして、そこで生じる一つ一つの感情に立ち止まることで、改めてイエス様に出会う瞬間が与えられるように願うものであります。お祈りをいたします。

神様。今日、私たちは受難節最後の週を歩み始めようとしています。十字架という、私たちにとっては、もう当たり前の出来事の中に秘められた、あなたの御心と御計画に想いを馳せることができますように。そして、信仰と現実の間において、戸惑い、悩み、躊躇う私たちのことを、どうかお導きください。あなたの人智を超えた出来事を、私たちはこれから見ようとしています。御子の死によって、私たちの罪が贖われること。御子の復活によって私たちの絶望が取り去られたこと。常識では語り切れない、これらの御業の意味を、ゆっくりと考え、自らの魂で味わうことができますように。今日から始まる1週間も、私たちの信仰を支え、良き気づきをお与えください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げいたします。

すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

神様。

季節の寒さと暖かさを行き来する、この3月最後の聖日において、私たちは4月にあなたの御下へと召された方々を憶えて祈りを合わせています。天地創造の前から存在した、あなたの愛と、あなたの栄光が、先に召されし信仰の先達の上に豊かに示されますように願います。彼らは、この地上において、あなたから与えられた務めを全うし、その人生を走り切り、天へと帰って行かれました。どうか、永遠の御国に辿り着いた、この方々の上に、生前あなたに捧げたその信仰に相応しいだけの恵みと慈しみを注いでください。また、今ここで、あなたに与えられた命を懸命に生きる、私たちのことを顧みてください。来る再会の日、敬愛する懐かしい信仰の友人たちと相見える時、私たちが自らの人生を胸張って語るができるように、私たちの日々の生活を導いてください。天の上には永久の安らぎと慈しみがありますように。そして、地の上には、あなたの力強いお支えと、豊かな憐れみをお与えください。私たちが、いずれ天へと帰っていく、その時まで、あなたを見上げて、信仰に守られて生きることができますように。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。